





コップに飲み物を少し残すのは、自分にとり憑いた幽霊に、無意識にお供えをしているからだそう。

そう僕に教えてくれたのは、彼女——サヤカだった。

その彼女の様子が最近、おかしいのだ。

サヤはベッドに腰掛けて、冷めたコーヒーの入った、青チェック柄のマグカップに口を付けた。テレビに映しだされる映画を見ているわけでもなく、小さいテーブルを挟んで正面に座った僕を見るわけでもなく、その視線は宙に投げ出されている。僕の斜め後ろ辺り。パソコンの乗っているデスクの上。

「——サヤ」

なんとは無しに、僕は声をかける。返答はない。

ただ、一点を見たまま。まるで、そこに何かがあるかのように。

ここ数日、ずっとこんな調子だ。あきらかにおかしい。

——いや、おかしいといえば、もっと前からずっと、おかしくはあるのだけど。

彼女と付き合い始めたのは、半年ほど前の話だ。同居を始めてからは、もう少しで三ヶ月になる。

出会った時から、飛びぬけておかしいと言うわけではなかった。もちろん、彼女自身が自分の特異な体質を自覚していて、それを隠していたからだろう。

僕と付き合い始めるとき、彼女はこう前置きした。

——私はとても変な人だから、もし付き合いきれないと思ったら、すぐに言って。じゃないと、すごく辛いから。シュンの前では、本当の自分でいたいから。

その時はよくわからなかったけれど、すぐにその意味を理解した。付き合い始めて徐々に、彼女はありのままの自分になった。最初こそ戸惑ったが、僕はその奇怪さに慣れていった。

僕はいくら変でも彼女が好きだったし、彼女が僕の前では飾らないでいてくれるのが嬉しくもあった。

同居を始めてからは、その異様な光景の頻繁さに驚いた。

例えば、僕が仕事から帰って来たときの話だ。

先にバイトから帰ってきていた彼女が、笑顔で出迎えてくれるのは、いつもの事。でも、その日の彼女は少し違かった。

玄関まで駆け寄ってきて、僕の前にしゃがみこんだ。僕の腰より少し下のあたりに声をかけた。ちいさい子でもあやすような声で。

———シュン、珍しい子を連れて来たね。こんばんは、どこから来たの？ お父さんかお母さんは？

言葉は出てこなかった。結局僕は、そこにいらしい子供に話しかける彼女を、ただ見ているしかできなかった。

他にもあった。

僕には見えない拾った猫に、彼女は餌をやっていたりする。

僕が、いないじゃないか、と口にしたものなら、責めるような目で僕を見るのだ。

———どんな猫なの？

そう聞くと、彼女は満足そうな笑みをこぼして、そこにいる愛らしい猫の話語った。

つまりは、彼女には幽霊が見えるらしい。

サヤがずっと見ている先、僕の斜め後ろを振り返りそうになるのを堪える。なんだかとても嫌な気分だった。

彼女が何も無い———何も無いはずである場所をぼーっと見ていることは、よくあることなのだけれど、ここ数日はどうにも耐えられない気分だ。

せっかくの休みだから、たまにはどこか二人で出掛けようと誘ったのに、サヤは体調がすぐれないからと外に出るのを拒んだ。だったら家で借りたDVDでも観ようという事にしたのに、彼女好みの邦画ミステリに注意を向けるわけでもなく、僕と会話を楽しむでもなく、何か正体の知れないモノへと意識を向けているのだ。

幽霊が見えている状況が、彼女にとって普通であることは重々承知している。それは、僕にとっても日常になり始めている。

なのに、異常なまでにそれが気になるのだ。

———いったい、なんだというのだ。

「……サヤ！」

「ん？」

強く呼んだ僕の声に、どうしたのだろうと言う目で彼女は振り返った。

「なにかいるの？」

僕の問いに、サヤは先程までジッと見ていた方とは真逆の方へと視線を落とした。

「べつに」

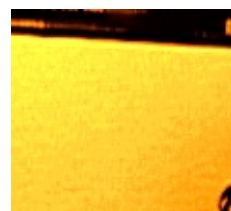
目を合わせることなく、彼女はベッドをきしませて、壁際の本棚から選ぶでもなく文庫本を手にとった。そのままベッドに身を預けて、ペラペラとページをめくる。嘘をついていることは、火を見るより明らかだ。

僕は、どうにも耐えられなくなり、斜め後ろを振り返った。彼女が見ていたあたり。ちょうど人が立ったら頭のありそうな位置———実際には、そこにはパソコンデスクがあるから立てないのだけれど———そこにはもちろん、何もなかった。

あきらめて彼女の方に向き直った瞬間。

———ガシャン

音を振り返った。キーボードの横に置いてある、ペン立てが倒れていた。立



っていたボールペンやマジックが床にまで落ちている。

彼女がここに越してくるときに持ってきたペン立てだ。と言っても、スチール製のカップなのだけれど。

僕はサヤを伺い見た。彼女は先程と変わらない様子で文庫本をめくっていた。もちろん、到底読んでいる様子ではない。

——だから、いったいなんだというのだ。

言ってくれないと、僕には分からないじゃないか。



夕飯が出来たと呼ばれて、ダイニングに行った僕は首をひねった。

テーブルに、三皿のカレーライスが並んでいる。

久しぶりのカレーだった。なぜだか知らないけれど、サヤはカレーにこだわりがあるらしく、何時間もかけて調理をする。だからなのか、僕らの食卓にこれが並ぶことはほとんどない。

しかし、珍しいのはそれが理由ではない。

「……誰か来るの？」

「え？」

ガラス戸の向こうのキッチンから、彼女は顔を出す。

「え、じゃなくて」

僕は指定席に腰をおろしながら、テーブルに並んだ三皿を視線で示した。

ああ、と彼女はその意味を汲んだ顔をして、誰の席でもない場所に置かれたそれに、手を伸ばした。

「……つい」

よそってしまったカレーをどうしようかという表情をするサヤ。

あまりにもその、いつものことだという顔に、僕はイラッとした。

「なあ、やっぱりサヤ、最近おかしいよ」

咎めるように言った僕に、彼女が少し驚いた様子で動きを止めた。

おかしいのは、本当は僕の方かもしれない。彼女の様子は、いつもと変わらず奇妙なのだから。

「……いや、たいした事じゃないんだけどね」

「なに？」

躊躇うような口ぶりに、僕は催促して聞く。



「――この前、友達の葬式に行ってきたじゃない？」

要らないカレーを、キッチンに下げながらそう切り出した。僕に背を向けたまま、彼女は続ける。

「そのときに、連れて帰ってきちゃったみたいなんだよね」

背がヒヤリとした。

連れて帰ってきたと言うのは、その亡くなった友達なのだろうか。

彼女は隠していたけれど、先日亡くなった友達と言うのが、彼女の元彼だということを僕は知っていた。共通の友人から、その男の名前をたまたま聞いたことがあって、それを覚えていたから気付いてしまったのだ。

その会ったことのない男が、この家にいるのか。僕は、全てを見渡せてしまうほどの広くはないアパートの部屋を見渡した。今いるダイニングと、開いた引き戸の向こうの八畳ほどの、ベッドやらテレビやらが置いてある生活空間。

「……つまり、その——友達が、ここにいる？」

「うん、いる」

僕の正面に座り、彼女は断言するように言った。引き戸の向こう。ちょうど、パソコンの置いてあるあたりを見ながら。さ迷っていた自分の視線をそこに移すが、もちろん何も見えない。

「……ごめん。追いつくのも忍びないし、初七日過ぎたらいなくなるんじゃないかと思ってたんだけど」

「……もう、とっくに過ぎてるよね」

彼女が喪服を着て出かけていったのは、もう二週間ほど前になる。

「うん……ごめん」

手元に視線を落として言う。謝ることなど何もないのに。

———そうか、だからか。

彼女は隠していたことを謝罪したのだ。

僕がイライラしていたのは、いつも彼女があっけらかんと幽霊の事を口にするのに、今回ばかりはそれを隠していたからだ。そう、気付いた。

それは、もちろん彼女なりの理由があつてのことなのだろうけれど。僕が、その友達が元彼であると気付いているか否かは別として、言いにくい心境であるのは確かなはずだから。

「謝ることじゃないよ。さ、食べよう——スプーンないよ」

僕が腰を上げると、彼女はそれを手で制して席を立った。キッチンへと姿を消す。

分かるはずもないのに、同じ空間にいるらしい見知らぬ男の気配を感じたような気がした。首の後ろ辺りで、得体の知れない感覚がぞわぞわと這った。

2月27日のこと

休日。例のごとく僕たちは家で時間を持て余していた。

テレビから興味もないドキュメンタリー番組がダラダラと流れ続けている。僕はベッドに座り、彼女は近くに椅子を寄せて傍の小さいテーブルに頬杖をついていた。

彼女はあまり外に出たがらない。嫌だと明言することはあまりないけれど、そうだとすることはなんとはいしに分かる。

それはもちろん、サヤが特異な体質であるからだ。彼女は霊を見ることができ、また寄せ付けやすいらしい。いつも人の往来の多い場所や、云われのある場所は避けて通っている。

彼女がアルバイトで生計を立てているのもそれ故だ。寄せ付けるが為、ひとところに長くいることができないらしい。僕の知っている大学時代だけ見ても、そのことで面倒が多いのはよくわかった。そして、同じ場所にいることができないのは、サヤの奇異な言動も理由の一つだと言う事も知った。本人は慣れたことなのか、それほど気にしている様子はない。

今日も今日で、二人で近所に買い物に出ただけで、早々に帰宅した。

サヤはテレビに完全に興味を失ったのか、マグカップの縁を指でなぞっている。僕はリモコンを手にして、チャンネルを変える。どこの番組も目に止まるようなものはなかった。

「面白いの無いね」

「ねぇ。――コーヒー入れてくるけど、何か飲む？」

そう、自分と僕のマグカップ――彼女との同じ色合いのストライプの物を手にとる。

「んー、野菜ジュース」

家にありもしないものを口にする。

「無いってば」

サヤが僕の冗談に笑う。それだけで、退屈なのがどうでもよくなった。

「――アキラは？」

彼女はパソコンデスクの方に向かって問うた。思わずそっちを見てしまう。

――なんなんだよ。

僕は彼女をねめつけた。

「あ……」

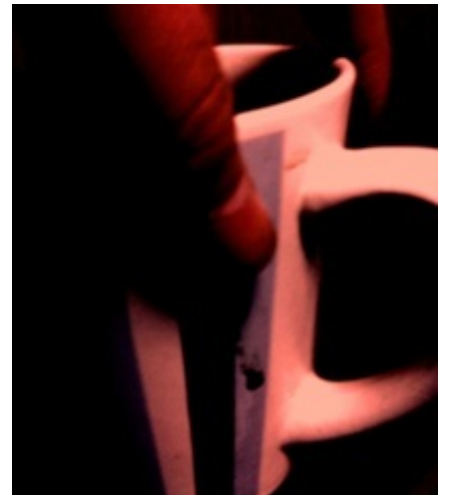
しまった、という顔で僕を見やった。

僕の中に、ふつつつと嫌な感情が湧いた。それは、なんというものだろうか。

「ごめん、つい……つい、ね？」

彼女は僕の機嫌を窺うように、僕の隣へとベッドをきしませて座った。黒い瞳が、反らした顔を覗き込んでくる。

「別に良いって――」



「よくない！」

僕の言葉をさえぎる彼女。

「ごめん、もう怖がらせるようなこと言わないから」

——僕は、怖いのだろうか？

「別に、怖がってなんかないし」

「じゃあ、怒ってる」

——僕は、怒ってるのか？

「怒ってもない」

「だったらそんな顔しないでよ」

声を上げて、肩に手をかけ僕の視線を自分へと向けようとするサヤ。

伺うようであり、怒ってもいて、悲しくもある、そんな目を彼女はしていた。

——そうか、僕は

「生きてない奴に、嫉妬した自分にイラついたの」

そう、正直に口にして、照れ隠しに僕は彼女の髪をぐじゃぐじゃと撫でた。

すると、その腕をサヤは乱暴に掴んだ。

「……ご、ごめん」

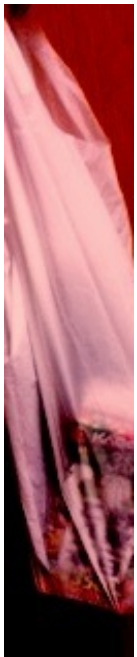
髪が乱れたことに、彼女は怒ったのではないと、すぐに気付いた。

そこにいる彼は、アキラとか言う名前の男は、少なくとも彼女が友達という程度の奴なのだ。

葬式で最後に別れをしようと思う程の相手ではあるのだ。

心ない言葉だった。

サヤは機嫌を損ねた顔のまま、自分のマグカップを手にもって、僕の隣から立ち上がった。引き戸の向こうへと姿を消す。



僕はベッドに力なく寝転がり、白い天井を見上げた。つまらないドキュメンタリー一の、涙を誘うような、しなやかなエンディング。それに混じって、サヤが玄関から出ていく音がした。

なんでこんなにも、目に見えない何かに心を揺り動かされなければならないのか。

サヤにとって、幽霊が他の生きた人間と変わらず存在するものだということは、とうに理解して、僕にとっても日常になったと思っていたのに。

今度ばかりは、落ち着かない。

——サヤ

彼女は僕の傍にいて、それは間違えなく確かなことなのに。

僕の不用意な言葉が、彼女のあたりまえの世界を傷つけ、ありのままのサヤではなくしてしまう。それは、酷く恐ろしい。

——早く、帰って来て

僕の不安をよそに、時間は過ぎていく。

部屋の隅の方、ちょうどパソコンの置いてあるあたりで、なにか物音がした。反射的に身構え、ベッドから起き上がりそうになるのを堪える。——僕にとっても、これは日常なんだ。そう

い聞かせる。

それから十数分と経たない頃。スーパーの袋に入った野菜ジュースと共に、彼女は帰ってきた。

3月5日のこと

早めに仕事が終わりに、軽い足取りで帰宅する。

鍵を開け、玄関を上がる。ダイニングは真っ暗で、引き戸の向こうから明かりがそそいでいる

。

「―――ただいま」

奥に向かって声をかけると、サヤがワンテンが遅れて寝起きの声を返してくる。

「……ん、おかえり」

ダイニングの電気が、チカチカと反応鈍く部屋を照らした。

テーブルに、嫌なものを見た。なんの変哲もない、コーヒーの入ったカップ。ただ、そのカップは、いつもならペンが立っているソレだった。パソコンの横に置いてある、マグカップのペン立て。

スチール製のカップ。付き合う前から、彼女がペン立てとして手元に置いている、ただのカップ。それなのに、僕はそれに意味を見出してしまった。

置いてあるだけのソレ。その横で、彼女が微笑む情景。サヤがいつもは僕に向ける無邪気な顔を、そのカップの持ち主に見せているという、幻想。

僕は、その余計な想像を、首を振って払いのける。

「―――なあ、なんだよこれ」

「……え？」

引き戸の向こうから、寝ぼけ眼なサヤが顔を覗かせる。

僕が手に取った、そのスチール製のペン立てに焦点を合わせ、目を丸めた。

「知らないよ、なんだろうね―――」

「知らないって、じゃあ、幽霊がカップ持ってきてコーヒー入れたってのかよ」
まくし立てるように口走った。

「だったらそうなんじゃない！」



サヤは声を荒げて、僕の手にあるカップを奪った。そのままそれを持って、キッチンへと向かう

。

———僕は馬鹿か

「……ごめん」

僕はサヤの後を追った。

サヤに腹を立てる理由がない。なのに僕は、この苛立ちを彼女に向けてしまった。

全ては、そこにいるらしい、僕には認知できない男のせいであるはずなのに。その僕に見えない何か、酷く怖いのだ。

「うるさい！ こっちくん」

サヤはマグカップを洗い流しながら、後ろから覗く僕を拒絶した。

「ごめんったら……」

謝る僕をねめつねながら、彼女はキッチンから出てくる。そのまま横を通り過ぎた。

「なんか、最近不安なんだよ……」

「なにが？」

問いながら、彼女は僕に背を向けて引き戸の向こうへといってしまう。それを追いかける。サヤはペン立てを元の場所に置き、転がっている元々立っていたペンを戻した。

「あの……」

僕は言葉の続きを探しながら彼女を追って、隣のベッドに腰を下ろした。

「その……アキラだっけ？」

サヤがやっと僕に視線を向け、隣に腰を下ろす。

「そいつが、サヤを連れていっちゃうんじゃないかって」

心の内を、どう表現したものかと考えめぐね、そう口にした。

———そう、怖いんだ

サヤを僕から、その男がさらっていってしまうんじゃないかと。

僕に靈感と言うモノはなく、その男の姿すら見えないのだけれど、そう不安に思うのだ。

その彼が、僕たちの日常に割って入り、僕たちだけの生活空間になり、をひそめ———僕の知りようのない会話を、もし彼女と交わしていたらと。もし、その得体の知れない存在が、彼女をそちら側へと引き込んでしまう事ができるのなら、と。

「何言ってるんだか」

ポカン、と驚きともとれる声で言ってから、彼女はクスリと笑った。

「そうそう簡単に幽霊に殺されてたまりますか」

「だってさ……」

僕には、その存在が分かりようがないのだ。サヤが大丈夫だと言っても、僕にはその言葉を信じる意外、確証を持てる資材がないのだから。



「まったく……どこにも行かないから、ね？」

心配する僕に、どこか呆れた口調でサヤは言った。

彼女にとっては、日常なのだ。

その幽霊が、友達であろうと、元彼であろうと。視えるが故に、そこには何かしらの生命と言おうか、意思疎通でき、感情の読める何かがあるのだ。それは、想像でしかないけれど。

僕は、サヤの言葉に頷くことしかできない。

———彼女が言うなら、大丈夫

そう、思う事しか僕にはできない。

3月8日のこと

玄関のドアを開ける。

身構えていたとおり、部屋の電気はどこもついていない。サヤは今日、家にいない。そう、メールを貰っていた。

リビングに足を踏み入れ、電気を付ける。

チカチカと照らされたその光の下、テーブルの上に、一枚の紙と食器がワンセット置いてある。その紙を手取る。チラシの裏に書かれた、サヤからの手紙。

——ゆかと夕飯に行ってきます。お味噌汁はキッチンにあるよ♪

それと一緒に、ハンバーグと彩りの野菜が乗ったお皿、茶碗とお椀が伏せてある。

手書きの手紙も嬉しければ、僕の為だけに作られた夕飯も嬉しい。双眸が緩むのを自分で感じた。

その時、ポケットの中で携帯が震えた。サヤとの共通の友人、ユカリからの電話だった。

「もしもし？ どうしたの、サヤならもう家出て——」

僕の言葉を遮るように、ユカリは血の気が引いていく事実を口にした。

「——どこ？ すぐ行く」

僕は全てをそのままに、慌てて家を出た。



サヤを連れだって、帰宅する。

ブーツを脱ぐのにまごついてるサヤを追い越し部屋に入った。緊張しきっていた肩を緩ませて、ダイニングの電気を付ける。

「……ったく、どうせまたフラフラ歩いてたんだろ。そんなかかとの高い靴履いてるから」

「そんなに高くないよ」

毒づく僕にサヤは反論するが、そんなのまったく威力が無い。

「じゃあ、今度スニーカー買って？」

冗談めかして言うサヤに、呆れかえる。

ユカリから、サヤがバイクにはねられて救急車で運ばれたと聞き、僕は慌てて言われた病院に向かった。血相を変えて見舞った僕に、あっけらかんと笑ったサヤ。怪我はたいしたことなく、手と頬にかすり傷が少し。

「何言ってるんだよ……こっちの気も知らないで」

病院で彼女の顔を見るまでに、僕がどれほど最悪の事態を考えたことか。

ため息一つついて、僕はキッチンへとカラカラに渴いた喉を潤しに向かう。

「ははっ、ごめんって。————あ、夕飯食べてる途中だったんだ、ごめんね」

その言葉を聞いて、僕はガラス戸からダイニングに顔を出した。

サヤが、半分に減ったハンバーグに添えられた、ニンジンのグラッセを掴まんでいた。

「……食べてないけど？」

「え？」

頬張ったまま、僕を見上げた。

———そう、そういえば

僕は、電気をつけたまま家を出なかったらどうか。

「まあ、誰かさんが食べたんでしょ」

サヤはなんてことないように言う。いつの間にか同居人になっている、あの男のことを。

腑に落ちない、そう思いながらも自分を納得させようと必死になる。そんな僕を見て、彼女はニコリと笑って僕を見上げる。

「ほら、私の手料理美味しいから」

そう言いながら、彼女は左腕を摩っていた。

「……なに、腕も痛いの？」

サヤの正面、指定席に腰を据えて僕は問う。

「え？ ううん……」

無意識だったのか、戸惑ったように言って手を止めた。

「なんで病院で言わないかな」

「いや、これは違うんだって」

手を伸ばした僕を避けるように、彼女は腕を引っ込める。

「なんでもない！」

「なにムキになってんだよ」

僕は無理やりサヤの手を掴んだ。

怪我に障らないよう、袖をまくる。

———どうしたっていうんだ

彼女の腕には、くっきりと青いあざが残っていた。手の形に。まるで、誰かが乱暴に掴んだような、そんな痕が。



「大丈夫だから、ね？」

凝視している僕に、彼女が覗きこんで言った。

「……シュン？」

「あいつだろ……」

「え？」

「あいつが、やったんだろ」

言葉が、心が口からこぼれていく。

「いや、これはアキラが――」

そこまで言って、サヤが口をつぐんだ。

痣からサヤへと視線を移す。彼女はバツがわるそうに視線を逸らした。

――そう、か……そうなのか

彼女の言葉の続きが、分かった気がした。

バイクにはねられてかすり傷で済んだのは、その彼が、サヤの腕を引いたからだ。

全ては予想だ。

注意力散漫な、僕の彼女の腕を、そのアキラと言う男が、彼女を守るために掴んだのだ。バイクに撥ねられ寸前のところで。だから、彼女は結果的に転んだだけで済んだのだ。

――彼女を助けたのは

「もういい加減にしろよ！」

叫んだ僕に、サヤは目を見開いた。――シュン？ そう呟いたが僕の声で消え去った。

「いつまでここにいるつもりだよ！ どっか行けよ！」

ふつつつと湧き上がるのは、嫉妬であり自責だ。

自分の感情が、手のうちから離れていく。どこともなく、流れ出ていく。

「……どっか、消えてくれよ」

懇願だった。

――お前が消えろよ



耳元を、声なき声がかすめた。それは、音だったか、なんなのか。

右耳に生温かく届いた言葉に、振り返った。

もちろん、そこに何かが居ることはない。

僕はその初めての感覚に、息を飲んだ。

一呼吸、いや、三呼吸くらい置いて、サヤの方を見やった。彼女も、当然のごとく聞こえていたようで、張りつめた表情を僕に向けていた。

ずっと僕は、彼女と一緒にいたいと、そう思っている。

なのにそれが最近、危ぶまれている気がしてならない。それは、彼女の特異な体質が原因というばかりではない。僕が臆病だからかもしれない。

仕事帰り、いつも通りドアノブに手をかける。鍵が掛かっていた。

この時間なら、サヤはいるはずなのに。

嫌な予感しかしない。

僕は慌てる手で、間誤付かせながら鍵を開けた。

部屋は暗い。

「ただいま」

返答はない。

「サヤ？」

靴を脱ぎ捨て、リビングを横切る。

「サヤ！」

引き戸の向こう、ベッドを覗きこむ。

よく、本を読みながら、そのままうたた寝していることがあるけれど。いない。

狭い部屋を見渡す。

———なんなんだ

目に入ったのは、マグカップだった。僕のストライプ柄のマグカップ。パソコンサイド、当然のようにペンが立てられている。

乱暴に手に取り、中のペンを抜き出した。

洗うために、キッチンへと踵を返す。

電気も点けず、暗いまま、僕はガラス戸の前で足を止めた。

流しの横。いつも彼女と僕のマグカップが置いてある水切りに、スチール製のカップが並んでいた。彼女のカップに寄り添うように、僕のものがあるべき場所に。



僕は手に持っていた自分のカップをザッと洗い、要らぬそれと入れ変えた。

ペン立てを元ある場所に、音を立てて乱暴に置く。ペンを戻す。

———いいかげんに

「いいかげんにしろよ！」

我慢の、限界だ。

「こそこそこそこそ、何やってんだよ」

手の中のカップを、床に叩きつけた。激しい打音に、僕の粗い呼吸が混じる。

「ここはお前の家じゃねえんだよ！ ———サヤは、サヤは僕の彼女だ！」

そこにいるはずの、忌々しい男に、声を投げつける。

「———文句があるなら出てこいよ！」

慣れない声を上げ、僕は力なく膝をついた。

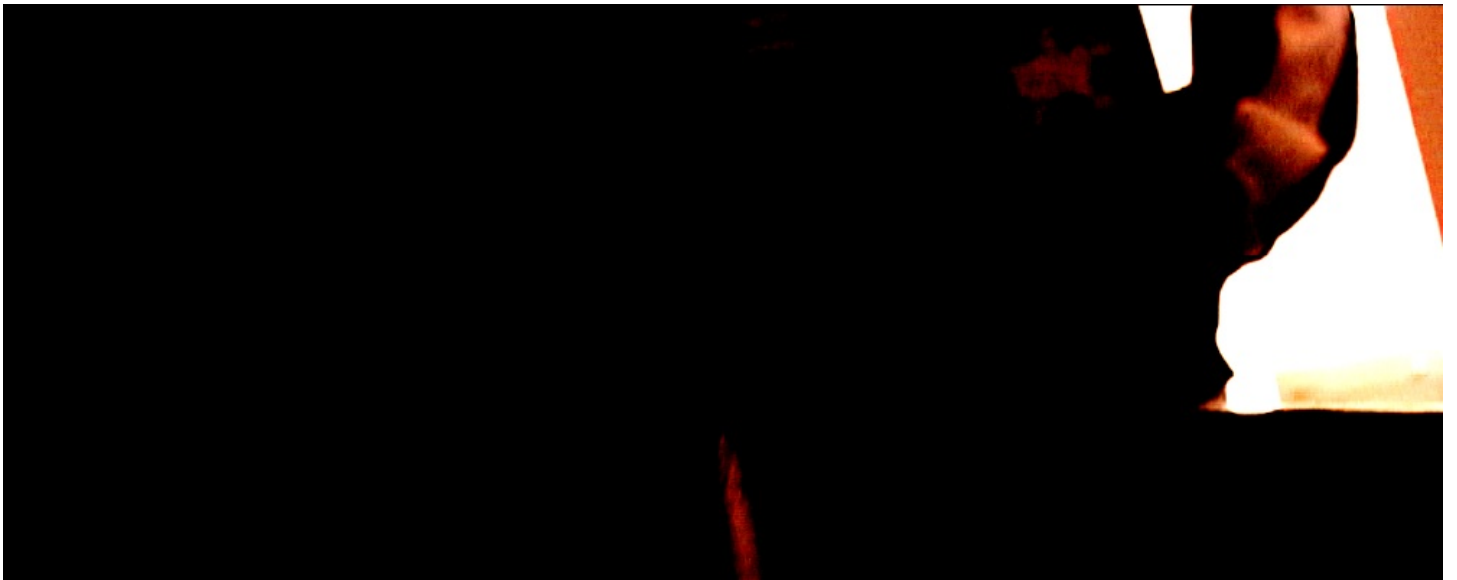
肩で息をする。自分が自分でないように、感情を持って余す。

視界に、影が落ちた。真っ暗なはずの部屋で、僕以外の何かが動いた。

息が、止まる。

背に、視線を感じる。

黒く禍々しい何かが、背後から———



足音がする。

サヤの歩みだ。僕の買ってやったスニーカーが、アパートの階段を上ってくる音。

鍵をさす音。施錠はされてないから、鍵を捻って空回りする音だけが届く。

ドアが開く音。サヤが、玄関で足を止めたのが分かる。

鍵が空いているのに、電気がついていないからだ。

「ただいまぁ」

部屋にいるはずの僕に、投げかける声。

——おかえり、サヤカ

駄目だよ、サヤ。そのまま、家を出るんだ。

それは、僕の声じゃない。

後記

後記、と言うのなら、この作品全てが、私にとって後記であるかもしれません。

もともと、この作品『a cup of ...』は映画作品です。

映画製作研究なる部に所属し、4年の最後の最後に自分が監督として撮った作品。その、ノベライズがこの作品に当たります。私にとっては、映画制作のしめのように感じます。

端々に使われている画像の八割は、映画から抽出編集したものです。

多くを語りはじめたら切りがないので、この辺で終わりとします。が、一つ言うとしたら、この作品を観た、或いは読んだ人が、その夜、少しでも背後を振り返られずにはいられなくなればいいな、と。そんな気持ちで作ったものです。

目に視えぬ住人は、どこにでもいると、私は思います。

それでは、まだまだ未熟者ですが、皆さまを少しでも楽しませることができればと、日々精進していく所存ですので、今後ともよろしくお願い致します。

Special Thanks

火月 (KaiHiduki_eye26)

a cup of ...

<http://p.booklog.jp/book/45007>

著者 : likecross

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/likecross/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45007>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45007>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.